



topics
トピックス
01

環境ESD演習 フィールドスタディ



01. スタディーツアーについて

今年度の副専攻「環境ESDプログラム」における特別科目「環境ESD演習」では、韓国釜山・済州島を訪れ、まちあるき文化(オルレ)や自然、食文化などについて調査を行いました。

20代の若者の運動への関心の低さ、身体活動の機会の減少といった背景を踏まえ、普段運動をあまりしない人々にウォーキングを魅力的かつ実践的な選択肢として提案する方法を模索しました。その一環として、ウォーキングの先進事例である韓国済州島のオルレに着目し、現地でのフィールド調査を実施することになりました。オルレに参加したことで、参加者が歩く目的や動機、歩行環境の整備状況、さらには観光や地域振興との連携について理解を深めることができ、ウォーキングを単なる身体活動としてではなく、文化的・社会的活動として位置づけている点が大きな学びとなりました。

02. スケジュール

本プログラムは事前学習・現地学習・事後学習の3段階で実施しました。

1. 事前学習

オルレおよび若者の健康に関する先行研究・文献調査を事前に実施した上で、宗像大島にて開催されているオルレに参加し理解を深めた。

2. 現地学習 2025年9月16日(火)～9月20日(土)

韓国済州島のオルレに参加し、現地の人々がオルレを取り組む目的、その理由について分析を行った。

3. 事後学習

環境ESD演習II授業内にて成果発表を行った。

03. 現地での活動内容

9月16日(火)

① 中心市街地の視察(済州島)

9月17日(水)

② 済州オルレの実施

9月18日(木)

③ 移動日

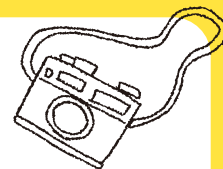
9月19日(金)

中心市街地の視察(釜山市)

9月20日(土)

中心市街地の視察(釜山)





04. 参加学生のコメント

● 外国語学部英米学科 3年 加峯希美さん

私たちは済州オルレの17番コース(約20km)を歩きました。私はこの演習を始めるまでオルレを知らなかったので、国外で観光地以外の場所を含めた長距離トレッキングをするということに対して新鮮な気持ちでした。最初は正確なスタート地点を確認しなかったために反対方向に歩いており、余計に歩いて時間を浪費する失敗をしてしまいました。しかし、他のオルレをしている人々と韓国語の翻訳機能を使いながら話していると、正しい方向を教えてもらうことができました。ここでオルレをしていた方々とコミュニケーションを取れたことは良い経験になったと思います。道中、歩く方向を示す旗と案内板が以前皆で歩いた宗像大島オルレよりも多くあることが印象に残っており、オルレを歩く人への整備がしっかり成されていると感じました。また、17番コースは山から見下ろす空港と離陸する飛行機や青い海など、きれいな景色を楽しめたことも印象に残っています。この日は1日中歩いていたのでかなり脚の疲労を感じましたが、運動不足が気になる若い人からお年寄りまで、コースと距離を考え自分のペースで歩くことができるとても良い運動になると感じました。また、散歩や土地の形成、人々の暮らしを見るのが好きな人向けにコースを考えてみたいと思いました。



● 外国語学部英米学科 2年 翁長花音さん

今回、私たちは学生3人と仙波先生の引率のもとで、韓国の済州島と釜山に4泊5日で渡航しました。済州島ではオルレ17コースに挑戦しましたが、序盤は誤って16コースを歩いてしまい、スタート地点を探すのにとても苦労しました。そこで地域の人や他の参加者に助けをもらい、翻訳アプリを使いながら交流できたことは印象深い経験となりました。歩行中はイホテウビーチでのサンセットや馬の灯台など、観光資源として工夫された景観を多々目にすることができました。終盤は直線道路が続き、体力的にも精神的にも厳しく完走はできなかったものの、オルレが年齢、性別に関係なく国境を越えて人気を集める理由を体感できました。その後訪れた釜山では、高層ビルが立ち並び「韓国の大阪」と呼ばれるにふさわしいほどの活気を五感で感じるすることができました。天川文化村を訪れ、さらに海鮮料理を味わいながら都市部らしい人の多さや若者向けの店舗を多く経験できました。今回の滞在を通じ、済州の自然と釜山の都市文化という全く異なる魅力を体験でき、日本との共通点や違いを学ぶと同時に、観光と地域社会の関わりについて改めて考える良い機会となりました。



● 地域創生学群地域創生学類 2年 弓場琉夏さん

フィールドスタディとして、韓国・済州島の「済州オルレ17コース」を歩く貴重な経験をした。自然環境の豊かさや地域の文化、現地の人々の温かさに触れることができ、歩くことで見えてくる景色や空気、音など、五感で感じる体験は、机上の学びでは得られないものもあった。

コースを歩く途中、地域の方々や同じオルレを楽しむ方々と交流する場面も多くあった。多言語で挨拶を交わす中で、言葉が完全に通じなくてもつながることができ、地域の人が観光客を温かく迎え入れてくれる雰囲気から、オルレが単なる観光ルートではなく、人と人を結ぶ「交流の道」としても大切にされていることが分かった。

距離が長く、きつい場面もあったが、道の途中にあるカンセ(応援の看板)やフォトスポット、文化的な建物などを見るたびに、「ここまで歩いたのだ」という実感がわき、達成感が得られた。オルレは、単にゴールすることだけでなく、歩く過程そのものであると感じた。

フィールドワーク後は「オルレの魅力をどのように大学生に伝えていくか」について話し合い、大学付近でのお散歩コース作成やカンセのような看板・フォトスポットを大学生と一緒に作成・設置するなど、現実的で前向きなアイデアが多く出すことができ、とても有意義な時間だった。

このような貴重な体験ができたのは、メンバーや先生方、現地の方々のおかげだと感じている。感謝の気持ちを忘れず、これからの学びや行動につなげていきたい。

